
新・仮面ライダーファイズA B！

断空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・仮面ライダーファイズAB！

【Nコード】

N7120Y

【作者名】

断空我

【あらすじ】

あの戦いから二年後。世界は平和だった。しかし、裏では世界を超えた陰謀が着実に進んでいる。それに立ち向かうは赤き閃光を継ぐ者。戦いの果てにあるのはなんなのか、それは誰も知らない。これは平和を求める戦いの中で救済を探す物語。

ビギニング(前書き)

はじまりました。不定期ですが楽しんでください。

ビギニング

とある山中で対特殊生物自衛隊、通称特生自衛隊の隊員達は防護服と様々な機械を持って洞窟の中を進んでいた。

『それにしても、これ……どこまで続くんだよ？かなり深いんじゃないか？』

先行している特生自衛隊隊員の一人、葉山進は壁に手をあてて悪態をつく。

『でも、反応が強くなっている……もう少しでたどり着くぞ』

仲間の関根健二が機械のメーターを見ながら進んでいく。

『なあ……家城』

『なに？』

先を歩いている家城に葉山が尋ねる。

『もし、この先にいるのが奴らだったらどうする？』

『それはないわ。この反応を見つけたフォンプレイバー自体が否定しているから』

『おい……あれ』

関根が何かを指差しているの、葉山と家城が光を当てると扉のよ
うなものがあつた。

『どうする？一旦戻るか？』

『……いいえ、行きましょう』

家城の言葉に二人は頷いて扉らしきものを押す。

ギ・ギ・ギ・ギ・ギ、とさび付いた音をたてて扉がゆっくりと開く。

『じじは……』

『研究室かなにか……みたいだな』

関根のいうとおり、様々な機械が埃をかぶっていて、机らしきもの
の上には赤い液体の入ったビーカーが複数置かれている。
研究室か実験室か何かだろう。

『おい！あれ！』

葉山が部屋の中央を指差す。

『“しらさぎ”……応答願います』

家城はヘルメットの通信機を起動させる。

『“じちら”“しらさぎ”何かあつたのか？』

通信相手は特生自衛隊の隊長、富樫だ。

家城は少し戸惑いながらも簡潔に目の前にある物の正体を告げる。

『“ベルト”……があります』

それが、この長く続く戦いの始まりの狼煙でもあった。

『罪人よ……』

『罪人よ……』

薄暗い路地裏から底冷えするような声が響き渡る。

その声に怯えながら一人の女性が後ろを時々振り返りながら逃げた。

逃げている女性の後ろをバツバツサと何かが羽ばたくような音が響き渡る。

『神は嘆き悲しんでおられます。愛していたのに、愛していたのに……と。神が流した涙を拭うために我々はやってきました』

段々と近づいてくる羽音に女性の恐怖は爆発寸前になる。

ゆっくりと振り返る女性の目に怪物の姿が映った。

背中に二枚の翼を生やし、口元にはおぞましい二本の牙、夜闇に羽ばたく不気味な怪物の牙がゆっくりと女性の喉下へ迫ってくる。

恐怖の余り女性が悲鳴を上げた。

『罪人よ。改めよ』

「罪人罪人、うっさいわよ！」

女性の悲鳴とは違う叫び声と同時に数発の銃弾が怪物の肩と頭を抉り取る。

突然の不意打ちを受けて怪物は壁に叩きつけられた。

女性が視線を向けると、バイクに乗った少女が手にベレッタM92Fを構えていた。

少女と銃という組み合わせのために女性の頭は混乱し始める。

「何やってんの！早く逃げて！」

少女にいわれて女性は躓きそうになりながらその場所から逃げ出す。

「ギ……ギギ……」

「気持ち悪い顔してるわね」

バイクから下りた少女、仲村ゆりはバイクから下りて銃を構えなおす。

「ギギギイイイ！」

怪物が叫びを上げながら羽を広げて襲い掛かってくる。

ゆりはそれに対して慌てず接近してきた怪物の顔に弾丸を何発か叩き込む。

弾丸は顔に当たって地面に落ちるが、目の近くを狙われたために、

怪物は目を閉じる。

その隙にゆりは間合いを詰めた。

「それでも食べていなさい！」

怪物の口に手榴弾を二個押し込む。

そして、一気に怪物を通り越して地面に伏せる。

ボゴボゴツと怪物の体が大きく膨れあがり、数秒後には肉体が破裂して当たりに肉片が飛び散る。

「ふう……」

ゆりは体についた肉片をはらいながら携帯電話であるところに連絡する。

あと少ししたら肉体を回収するために人を寄越すだろう。

「……絶対、許さないわ」

小さく呟いてゆりはバイクに乗って道路に走り出す。

彼女がいた場所に落ちていた肉片から小さな機械みたいなものが転がり出た。

海鳴市。

風都、空夢町との間にある街で、海からの潮風が気持ちいい街である。

海鳴市の小さなアパートに音無結弦の姿があった。

「朝か……」

布団を畳んで私服に着替えて外に出ようとすると、傍においてある携帯電話から着信音が流れ出す。

「……もしもし？」

『お、出た出た』

「なんですか？鳩村先生」

電話の相手は音無が働いている小さな病院の医師で名を鳩村周五郎という。

彼と音無の出会いはおいておくとして、この時間帯に彼から電話がかかってくるのは珍しかった。

『実はさ、急患があつて、俺は今から隣町に出かけないといけなくなっちゃつてさ。悪いんだけど、他の患者さん。俺の代わりに診てもらえる？』

「いいですけど、医師免許とつたばかりの新人にやらせますか？」

『大丈夫大丈夫！この天才外科医の鳩村先生が鍛えているんだから大丈夫！ああ、それと生っすか！サンデーを録画しておいてくれない？』

「……年齢考えろ」

ひどっ、という言葉を確認して音無は電話を切って音無は入り口においてあるヘルメットを手にとってアパートの部屋から出て行く。

「日向は・・・まだ帰ってきていないのか」

向かいの部屋の住人、日向秀樹は音無との友人であり仲間なのだが、ある理由でいつもバイクに乗って街を走っている。

彼は探さないといけない人がいるから。

どうしても見つけないといけない人。

音無はいない仲間のことを思いながら外に出る。

駐輪場に停車させてあるバイクに乗って音無は目的地へ向かう。

佐伯風華は海鳴駅から下りて周りを見渡す。

「ここが海鳴かあ、潮風とか気持ちいいわね。ほら、大山君いくわよ」

「あ、はい！」

佐伯風華は助手であり部下の大山と一緒にホテルへと向かう。

彼女たちがここに来たのには理由がある。

最近、海鳴で怪事件が起きているという噂が流れていた。

それともう一つ。

彼女は気になっている事。

「（赤い仮面の戦士の噂・・・もし、その仮面ライダーが彼なら・・・）」

「佐伯さん、荷物少しくらい持ってくださいよ」

「大山君……」

「はい」

「頑張れ」

「そんなあ！」

大山の悲鳴が海鳴の町に響いた。

人が少ない裏道、そこで異形が蠢いていた。

異形の怪物の前には不良達が全員地面に倒れている。

死んではないようだ、かなり重傷である事が見てわかった。

『……ククク』

怪物は小さく笑ってどこかへと姿を消す。

海鳴にあるビジネスホテルをかりて大山と佐伯は部屋で今回の取材の内容について整理する。

「今回、僕達が海鳴にきた理由ってなんなんですか？」

「最近、この町でそっくりさんが現れているらしいの」

「それって、“ドッペルゲンガー”ですか？」

「そう、「ドッペルゲンガー」なの」

“ドッペルゲンガー”自分で違う自分を見る現象の事で、自ら自分のドッペルゲンガーを目撃したものはその者の寿命が尽きる寸前の証という民間伝承もあり、未確認ながらも過去にその例らしきものが確認されている。

「でも、その情報って信頼できるんですか？いくらATASHIジャーナルがオカルトとか範囲に含まれているっていわれても明らかにウソなら信じてもらえないと思うんですけど？」

二人が所属しているATASHIジャーナルは数年の間に規模が大きくなり最近では幅広いジャンルを担当するようになっていた。オカルトもそのジャンルの一つなのだが、二人はオカルト担当ではない。

「最近、人手不足だからね。田井中編集長もぼやいていたわ」

「いや、あれはさぼっているからじゃないですかね？」

困ったわね、という佐伯に対して大山は机の上にぐでーとしている編集長補佐の姿が脳裏に蘇っていた。

「とにかく、私達がやる事は、町に出て情報を集める事よ。運よくドッペルゲンガーについての情報を握っている人に取材の約束を取り付けられたから幸先いいわよ」

「そうですね！準備してきます」

「ええ」

十分後、二人は準備を終えてタクシーに乗って目的地へと向かっていく。

『ギヤアアアア！』

薄暗い路地裏で怪物が地面をゴロゴロと転がる。

怪物が転がってきた方向には体中に赤いエネルギー流動経路・フォトンストリームが流れており、体を覆う装甲は特殊合金ルナメタルで作られており普通の攻撃ではびくともしない、そして、仮面の前部分を半月のような黄色い複眼、そして鮫を燃したようなクラッシュヤーがついていた。

暗闇の中流動経路が赤く輝いていて、目に焼きついたら忘れる事はできないかもしれない。

『ギ……ギギギギ』

「……………」

怪物はどこか機械的な唸り声を上げながらコツチを見ている。お前は何者だと問いたいのだろうか。

「……………」

一気に間合いを詰めたファイズは連打でパンチを叩き込む。相手の反撃を許さない強力な一撃を最後に受けて怪物は狭い壁に叩きつけられた。

『……………ギ……ギギ』

「…………許せ」

ファイズは一旦、怪物に距離を置いてだっ、と一気に駆け出す。怪物が何かするよりも早くファイズのキックを受けて怪物は大きく後ろに飛んで壁に叩きつけられた。

『…………ぐおおおおおおおおおおおおお！？』

体に のマークが浮かび上がり爆発する。

ファイズの周りに大量の肉片と機械の残骸のようなものが乱雑した。

「……………」

周りの肉片に関して何か思うところがあるのかファイズは周囲の肉片を全て集めて骨壺のような箱の中に仕舞いこむ。

そして、近くに停車させていたオートバジンに乗り込んだ。

セカンド・コンタクト

「・・・腹減った」

音無はバイクを止めてある店へと入っていく。

「千回死んでこおおおおおい！」

店の看板にはレストラン相田と書かれてある。

入った直後、音無のすぐ横を客らしき人物が吹っ飛んでいく。そう、文字通り飛んで行った。

「またか・・・野田」

音無の目の前で細長い棒のようなものを狭い店内で構えた目つきの悪い野田が立っていた。

「なんだ、お前も店の悪口をいいにぐっ！」

「大事なお客様になにしてんの！」

パソコンと野田の頭上にフライパンが叩き込まれて地面にうずくまる野田の前にこの店の店主の娘、相田エリコがやってくる。

気の強い彼女の前に野田はなにもいわずに厨房へと戻っていく。

「いらっしやい。音無君。何にする？」

「チャーシュー麺で」

「はいはい、お父さん。チャーシュー一丁！」

音無は席に座る。

この店の店主、相田伊三と相田エリコの二人で経営しているのだが、この店にバイトしている風変わり人間が何人かいて、その一人が先ほどの野田だ。

料理の腕はそこそこあるのだが、店の悪口を言う客に対しては容赦ない。もつとも、彼の認識する悪口と一般的な悪口の間に大きな溝があるのを音無は知っている。

「はい、チャーシューお待ち」

「ああ……つて、待て」

「なんだ？」

運ばれてきたチャーシューは確かにチャーシューだ。但し。

「なんでチャーシュー麺なのに、肉うどんの肉が入っているんだよ！松下五段！」

「あ……しまった」

運んできたウェイター、松下五段は肉うどんが大好物で、どんなことでも肉うどんを取引きの内容に出せば引き受けてくれるという優しいのか扱いやすいのかわかりにくい相手だ。

「まあ、食べてくれ。おいしいから」

「……ああ」

音無はため息を吐きながらふーふー、と何度も麺に息を吹きかけながら食べ始める。

それを見ていたエリコが不思議そうな顔をして尋ねた。

「音無君って、変わっているわよね？猫舌なのにもラーメン頼んでさ。冷麺くらい作れるよ？」

「別にいいんだよ。これが好きだからさ」

「まあいいけど、あ、生っすか始まる！」

エリコはテレビのリモコンのチャンネルを変える。

すると、テレビの画面に765プロのアイドル、天海春香、如月千早、星井美希の三人が映った。

『では、早速今日のトップバッターは！』

「あ、始まった！」

「はぁ……」

音無はため息を吐いて目の前のテレビを見る。

テレビには最近売れているアイドル達・765プロのアイドル全員によるコメディ番組が始まっていた。

765プロに所属しているアイドル達は二年前に急激に人気上昇して、今では国内で知らないものは少ないといえるレベルの人気がある。

そんな彼女達が様々な事をするのが生つつすか！サンデーだ。

その頃、佐伯風華と大山は情報を提供してくれる人が指定した場所へとやってきていた。
人通りが少ない工場地帯で待っていた。

「情報提供にしてはやけに人が少ないですね。誰かに聞かれるのを恐れて・・・かな？」

「それなら人ごみが多い方がいいはずよ。木の葉を隠すなら森の中

という風に人ごみなら戯言として処理されやすいのに……
「おかしいわね」

記者としての勘が危険信号を打ち鳴らしていた。

こういう時はすぐに場所を離れるのが得策なのだが、貴重な情報を得られるためにはどんな危険な事でも覚悟しなければならない。

『グルルルルル』

もつとも、それが前人未到に近い“怪人”の出現であれば彼女の許容範囲の危険を超えている。

「か、怪物!？」

『……ジャマモノ……ハイジヨ』

どこか機械的な言葉を呟きながらバイクのような外見をしたアクセルドーパントは体から炎を吹き出す。

ドーパント・風都に存在していた秘密組織ミュージアムにより製造されていた特殊アイテム・ガイアメモリを普通の人間が使うことにより超常的な力を得ることができた。

しかし、今やガイアメモリを見ることは少ない。
なぜなら。

「大山君!危ない!」

アクセルドーパントが炎を纏ったのを見て佐伯は隣にいた大山を突き飛ばす。

彼がいた場所を炎のタイヤのようなものが通過した。

地面には焼け焦げた跡がある。

「大丈夫？」

「あ……はい、でも、かなり危ないですよね!？」

「そうね……ともかくここから逃げるわよ！」

大山の手を引いて逃げようとする佐伯の横を足がバイクの車輪へと変形したアクセルドーパントが行く手を遮るために動いて道を塞ぐ。

『ハイジヨ……ハイジヨ……ハイジヨオ!』

機械的な言葉を呟きながら掌に炎を纏ってゆつくりと佐伯達に迫ってくる。

「ひっ！」

「あ……っ」

恐怖で座り込む大山、それに対して佐伯の脳裏にはある出来事が蘇っていた。

火の中で叫び夫婦に向かって叫んでいる小さな時の……。

ブオオオオオオオオオン!

佐伯の思考を破壊するかのようになり一台のバイクのタイヤがアクセルドーパントに命中してごろごろと地面を転がる。

バイクはギョルルと音を立てて佐伯達の前に停車する。

その姿を見た二人は同時に声を漏らす。

「え………」

「ウソ………」

黒いライダースーツのようなものに銀色のアーマーを纏い、半月のような複眼のついた仮面に鮫のようなクラッシャーをつけたフェイスが立っていた。

フェイスは迫ってきたアクセルドーパントを殴り飛ばす。

『グググ……』

殴り飛ばされたアクセルドーパントは壁に叩きつけられる。

「！」

迫り来るフェイスにアクセルドーパントは掌に火球を作り出して攻撃を放つが、それら全てをフェイスは避けていき、強力なキックをアクセルドーパントに叩き込んだ。

アクセルドーパントに「のマークが浮かび上がる。」

『グギ……グオオオオオオオオオオオオオオGYAoooo
oooooooooooooooooooooooooooo』

悲鳴が途中でおかしな声をとなりアクセルドーパントの体が大きく膨れ上がり巨大な車輪となって町に向かって走り出す。
メモリの力が暴走しているようだ。

「……逃がすか」

ファイズは停車しているオートバジンに跨りアクセルを回してアクセルドーパントを追跡する。

佐伯達は呆然と先ほどの光景を見ていた。

アクセルドーパントは炎の車輪となりながら公道を走っている。

幸い、対向車がないから被害はまだない。

その後ろをオートバジンに乗ったファイズが追跡していた。

「・・・これ以上は行かせない」

ファイズはベルトからファイズフォンを外してフォンブラスタースタードへと切り替えて103を入力する。

『Single Mode』

ファイズフォンからレーザーが放たれて攻撃を受けたアクセルドーパントの軌道が大きく変わった。

その隙にファイズは大きく回りこんで、ベルトの側面に装着されているカメラ型の武器ファイズショットを取り出してミッションメモリーを差し込む。

『Ready』

ファイズフォンを開いてEnterキーを押す。

『Exceed Charge』

音声と同時にベルトの左側面から光がフォトンブラットの周りを走

ってファイズショットにエネルギーがチャージされる。
アクセルドーパントは炎を強く吹き上げながらファイズへ迫った。

「うおりゃあ！」

ファイズはファイズショットによる必殺技“グランインパクト”を放つ。

必殺技を受けたアクセルドーパントの体から　のマークが浮かび上がり爆発する。

佐伯風華達が追いつくと既に戦闘は終わっていた。

「……一つ目」

ファイズの手の中には細長いAと書かれた赤いガイアメモリが握られていて、少し眺めた後、それを握りつぶす。

「すごい……」

大山が感想を呟いていると、一台の車がファイズに向かってぶつかる。

いや、ぶつかる手前にファイズが手を出して車体を受け止めていた。車の衝撃によりファイズの体は先ほどより少し後ろに下がっている。

「今度はなに!？」

驚くのはこれからだった。

車を壊しながら銀色のアーマーのようなものを纏った男二人がファイズに襲い掛かってくる。

ファイズは男達二人の拳を受け止めてそのまま車から投げ飛ばす。投げ飛ばされた二人は地面に倒れる事はなく、それどころか足からジェット噴射のようなものを噴き出して着地する。

「えええええつ！？あれ人じゃないの？」

大山が絶叫して驚く、もちろん佐伯も驚いている。

男達二人はどこかぎこちない動きでファイズに襲い掛かろうとしたしかし、それよりも早くファイズフォンをフォンブラスターへと切り替えてコードを入力しトリガーを引いていた。

赤い光が男達を貫いた。

男達は悲鳴を上げることなくそのまま止まる。

「ウソ・・・あれ、ロボットなの！？」

動かなくなった男達に背を向けたファイズだが、

「危ない！」

佐伯の叫び声にファイズの反応が一瞬遅れた。

機能停止していたと思っていた男達が急に活動を再開してファイズに抱きつこうとせまったのである。

反応が遅れていたファイズはよける事ができない。

しかし、男達がファイズに何かをする事ができなかった。

停車していたオートバジンがオートで動き出して男達を突き飛ばしたからだ。

男達は積み重なるようにして倒れてそのまま爆発を起こす。

「ぎゃっ！」

「わっ！」

爆風に煽られて二人はしりもちをつく。

「・・・いない!？」

爆風が消えたとき、そこにはファイズの姿はなかった。

「おのれえ、ファイズう！」

薄暗い空間で一人の男が拳を座っていた椅子に叩きつけた。

目の前には複数の画面があり、そのどれもが黒い戦士ファイズを映していた。

そして、ひとつのカメラがファイズを襲撃した男達の残骸を映している。

骨や肉片だけではなく赤いケーブルや機械のようなものが紛れ込んでいた。

男達は映像を見ている男によってサイボーグとして製造されたのである。

なんのために？それを知る者はいない。

「“TOMEMORI”を失った事は大きい。しかし……」

男はにやりと口元を歪めた。

「私の計画が暴露されたわけではない……ファイズよ。せいぜい地面をはいつくばって足掻くといい。無駄な事をな！」

セカンド・コンタクト（後書き）

どうも、ファイズ第二話更新することにしました。

基本、こっちの作品はドラゴンナイト優先であるので比較的遅くするつもりでしたが、話を進めるにあたって、意見が欲しくなったので投稿することにしました。

んで、その内容というのがファイズの根本に関わる話なので、意見が欲しいです。

にじふあんを利用している人なら知っていると思うのですが転生者を登場させようと思っています。

といっても、主役になるわけではありません。

とにかく転生者を出そうと思っていて、どのような形に出すかはここでは述べられません。

もし、転生者についての意見してもいいよ〜という心優しい人がいてくれたらコメントしてください。

メッセージで転生者について書くつもりなので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120y/>

新・仮面ライダーファイズAB！

2011年11月28日00時02分発行